

菅野仁著

『友だち幻想——人と人の（つながり）を考える』

（ちくまプリマー新書・二〇〇八年三月）

望月 まさえ



「友だちとの距離のとり方が分からない・・・」「人とどうやって付き合っているのか分からなくなっている」。そのような彼らは、相手に合わせ過ぎてしまい、その結果しんどくなって相手をシャットアウトすることを選んでしまう。あるいは相手に必要以上に近づき過ぎてしまい、自分の意図しないところで相手の怒りを買って、ひどいことを言われたり、急に無視をされたりして、傷つくことで相手に近づくことを躊躇してしまふ。どの位置に自分の身をおいたらよいか迷いぬいた拳句、相手との付き合い方が分からなくなってしまうのである。

特に年齢が若いうちは、近づくことに失敗をすると、極端に距離をとって自分の身を守ることを考えがちで、「少し距離をおいて様子を見る」という選択肢は思いつかない。確かに、「お互い腹を割って話し合うほどの仲ではないけれど、」身近にいる人“と人間関係を築くのは、大人になっても意外と難しい。

本書は、そういった人付き合いの上での困難さや、身近な人とのつながりを見つめ直し、現代社会に求められている「親しさ」とはどのようなものであるかをとらえ直すための「見取り図」を描けるよう、われわれに助言を与えてくれる。

著者である菅野仁氏は、社会学・コミュニケーション論を専門とする研究者であり、現在、宮城教育大学教育学部教授として、教師を目指す学生の指導にあたっている。また、教育現場で活躍する教師らとも関わることから、本書は現場の生の声も生かされている。社会学の手法や考え方をういながらも、難解な専門用語やデータは省いて、著者の考えを展開しているため、人付き合いに悩む若い読者は親しみをもちやすいだろう。さらに、若者に関わる大人や一般の人に向けたメッセージもあり、示唆に富んだ内容となっている。

かつての日本では、大人たちから「人は一人では生きていけない」と教えられ、そのことを実感する場面が数多くあった。そのため、このことは、共同体の中で同質性を重視する「ムラ社会」を形成していた日本において体験されやすい現実であった。ところが社会の成り立ちに変化が訪れ、定着してしまつた現代に若者たちは生み落とされる。親や年配の世代の価値観と明白なズレを抱える彼らには、この世の中は「案外、人は一人で生きていける」ように思える世界なのである。このことを指摘しつつ、著者は「一人でも生きていくことが出来てしまう社会だから人とのつながることが昔よりも複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本当の意味で大切になってきている」と述べ、「今の時代」にフィットしない同質性ありきの人付き合い合

いにおける作法から、自覚的に脱却することを提案している。

これまでの社会において、漠然としか認識されてこなかった「人と人との距離感」を丁寧に見つめ直し、気の合わない人とも一緒にいる作法をきちんと考え直す。そのための一つのキーワードが本書のタイトルである「友だち幻想」である。「友だち幻想」とは、「自分のことを百パーセント丸ごと受け入れてくれる人がこの世の中のどこかにいて、いつかきつと出会えるはずだ」という、まだ見ぬ友だちを求める幻想のことである。中学生や高校生の語りからよく聞かれる幻想ではあるが、大人になっても意外と頭の片隅で求めている人も多くいるのではないだろうか。

著者はそんな甘い幻想にズバっと切り込み、われわれが知らず知らずのうちに身につけている常識や価値観を見つめ直すヒントや示唆を与えてくれている。「当たり前」のことが分かりやすく的確にまとめられながらも、新書にありがちなハウツーで終わらないので、抽象的なアドバイスが苦手な悩める若者や、忙しさのあまり考える時間を奪われた大人が読むのに最適な一冊である。

臨床心理学の専門書ではなかなか見ることの出来ない明快な表現も、臨床家にとっては新鮮に映る。ぜひ一度、手に取ってみてほしい。

(もちづきまさえ・臨床心理学)